

聖ウルリッヒの列聖教書

— 試訳および解説 —

渡 邊 浩

はじめに

今日、聖人を認定する行為、すなわち列聖は、教皇権(ヴァティカン)の独占的な権限に属している。しかし、時代を遡ってキリスト教初期の時代に目を向ければ、ある特定の人物を殉教者や聖人と見なして崇敬する行為が一般信者の中から自然発生的に生じたことや、教会組織の形成とともに聖人の認定行為が司教の指導下でなされるようになっていったことが認められる。その後、西方では、カール大帝(在位 768-814)の一連の立法によって整備がなされると、聖人の認定行為には司教以外にも君主、さらには盛大さや確実性を求めて、教会会議が関与するようになる。そして、その延長上に教皇権が登場すると、教皇権は 11, 12 世紀における権威の上昇を背景として、列聖の独占的な権限を獲得するに至った*1。

以上のような列聖手続きの歴史的展開を、我々は既に概観した。その際、教皇権による独占的列聖権の獲得との関連で、考察すべき課題として残されたのが教皇権の関与を要請した諸教会あるいは申請者側の事情であった*2。そして、このような課題にとって、教皇権による最初の列聖は、当然取り上げられるべき事例の一つとなるだろう。

さて、教皇権による列聖の最初の事例とされるのは、993 年、教皇ヨハネス 15 世(在位 985-996)によるアウグスブルク司教ウルリッヒ(ウダ

* 1 E.W. Kemp, *Canonization and Authority in the Western Church*, Oxford, 1948, p.55.

* 2 拙稿「列聖手続きの歴史的展開——起源から教皇による列聖まで——」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第 2 号, 2001 年, 33-58 頁。

ルリクス) (在位 923-973) の列聖である。それは、列聖に際して出された教書が、原本は失われたとはいえ、写本や印刷物のかたちで今日にまで伝わっている最古の事例であることによる。以後、教皇権は、例外はあるものの、関与した場合には教書を以て列聖を宣言するようになる。列聖教書の発行は、史料的観点からいえば、列聖を求める申請者側の史料、すなわち伝記、奇跡録、移葬記などに加えて、認定者である教皇権側の一連の史料が登場したことを意味し、それらは時代とともに推移したであろう、列聖についての教皇権側の見解を映し出すものと期待される。

これまで、ウルリッヒの列聖教書は真正と考えられ、諸研究もそれを前提に進められてきたが、近年、ウルリッヒの列聖教書の真正性に疑問を投げかける研究も出されている*³。この教書の真偽をめぐる議論は別稿に譲るとして、本稿では聖ウルリッヒの列聖教書を訳出し、簡単な解説を添えることのみを課題としたい。本教書は教皇権が列聖に関与するに至る歴史的展開のなかで言及されることが多いが*⁴、ここでは申請者側の状況の解明に向けて、聖人とされた当人、ウルリッヒとの関連で補足的な説明を加える。

さて、従来どおり真正と見なされるなら、この教書はウルリッヒの列聖に関する主要史料の一つであり、教皇権の列聖についての見解を示す史料群の出発点としての位置を占める。また、偽作であったとしても、真偽の議論に立ち入る前提として、この教書をここに全体として提示することに意味はあるだろう。

1. 写本・刊本

ウルリッヒの列聖教書の原本は失われて現存しない。しかし、この教

* 3 *Lexikon des Mittelalters*, Stuttgart, 1999, Bd. VIII, S.1173-1174.

* 4 S. Hertling, "Materiali per la storia del processo di Canonizzazione", *Gregorianum*, 16 (1935), pp.176-177; E.W. Kemp, *op. cit.*, p.57; A. Vauchez, *La sainteté en occident aux derniers siècles du moyen âge d'après les procès de canonisation et les documents hagiographiques*, Rome, 1981, p.25; Y. Chiron, *Enquête sur les canonisations*, Paris, 1998, pp.48-49.

書は16世紀以来、都市アウグスブルクの守護聖人である聖ウルリッヒや聖アフラを扱った書物、あるいは教会史や教会会議の史料集など、ときにはウルリッヒの伝記とともに、20以上の文献に採録され、印刷されてきた。その最初は1516年にアウグスブルクで出版された、ライヒェナウのベルノーによる *Gloriosorum Christi confessorum Vldarici et Symperti necnon beatissime martytiris Aphre, Augustane sedis patronorum quam fidelissimorum historie, horarum de eis, pro ut nostro in coenobio percelebri observantur canonicarum insertione, cuilibet easdem devotionis causa persolvere volenti habunde satisfacientis* で、次に1595年にアウグスブルク市長で歴史家であったマルクス・ヴェルザーが出版した *De vita sancti Udalrici Augustanorum Vindelicorum episcopi quae extant* が続く。両者の印刷にあたって用いられた写本はいずれも今日では失われたとされ、そのような事情のためか、後に出された版の多くが後者すなわちヴェルザー版を手本としている*5。ここで試訳の底本としたのはツィーマーマンによる校訂版であるが、やはりヴェルザー版をもとに、不完全なベルノー版よって補足したものである*6。また、訳出にあたってはビショフによるドイツ語訳も参照し

* 5 この教書のこれまでの刊行状況については以下を参照。H. Zimmermann (Bearb.), *Papsturkunden 896-1046*, Bd. I, Wien, 1984, S.611-612; F. X. Bischof, "Die Kanonisation Bischof Ulrichs auf der Lateransynode des Jahres 993", in: M. Weitlauff (Herg.), *Bischof Ulrich von Augsburg 890-973 Seine Zeit — sein Leben — seine Verehrung: Festschrift aus Anlaß des tausendjährigen Jubiläums seiner Kanonisation im Jahre 993*, Weissenhorn, 1993, S.205-206. また、我が国で比較的容易に利用し得る史料についていえば、『モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ』や『アクタ・サントールム』に収められた版がヴェルザー版に基づいているのに対し、マンシやミーニュが収録した版は別系統である。後者がいかなる写本に依拠したかは未確認であるが、ヴェルザー版との違いは前置詞や接続詞の相違・欠如、修飾語の欠如などの若干で、それほど大きなものではない。Cf. *Monumenta Germaniae Historica, Scriptores*, IV, Hannover, 1963, S.378-379; *Acta sanctorum quotquot toto orbe coluntur...*, Julii t.2, Paris, 1867, p. 80; J.D. Mansi, *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio*, Graz, 1960, t.19, col.169-172; J.P. Migne, *Patrologiae cursus completus: series latina*, Paris, 1845-1865, t.147, col.845-847.

た*7。

上述のように初期の印刷版のもととなった写本は現存しないとされるが、聖ウルリッヒ・アフラ修道院で15世紀末に作られた写本に収められていた教書が、最近になって再び知られるようになったという*8。ミュンヘン、バイエルン州立文書館所蔵のラテン語写本4353番14葉に書かれたものがそれで、試みに判読して写真とともに付録として掲げた。判読したものを、ツィマーマン版の註に従って復元したベルノー版(1515)およびヴェルザー版(1595)と比較してみると、欠損箇所の内容などから*9、ヴェルザー版ではなくベルノー版の手本となった写本に近いことがわかる。ただし、語彙に若干の相違も認められ、まったく同一とは言えない。

2. 教書試訳

神の僕のなかの僕，司教ヨハネスより，ガリアとゲルマニアで任にあたるすべての大司教，司教および修道院長らに主における挨拶と使徒の祝福を送る。

1月31日にラテラノ宮で会議が開かれたとき，ヨハネス教皇聖下が司教や司祭とともに臨席し，助祭やすべての聖職者がそばに控えるなか，

* 6 H. Zimmermann, *op. cit.*, Bd. I, S.612-613.

* 7 F.X. Bischof, *op. cit.*, S.219-222.

* 8 *Ibid.*, S.205.

* 9 欠損箇所は署名部分に認められる。7人目と8人目の署名がヴェルザー版では，Bonizo archipresbyter et cardinalis sanctae Luciae consensu. Benedictus presbyter et cardinalis sancti Stephani consensu (下線部，筆者)とあるのに対し，バイエルン写本ではベルノー版と同様，下線部分が欠落している。また，これらにおいては，最後から2人目の署名者である Benedictus diaconus がともに欠けており，後半の署名者について consensu の省略が目立つ。なお，発行日について，ヴェルザーは tertio Kalendas Februarii を tertio nonas Februarii と訂正して印刷したが，バイエルン写本でも，ベルノーやヴェルザーが用いた写本と同様 Kalendas と表記されている。以上については，付録の写本および判読文も参照のこと。

大いに敬うべきアウグスブルク司教レイトルフスは立ち上がって、次のように述べた。「教皇聖下。聖下やこの場にいるすべての司教や司祭にとって差し支えがなければ、私が手元に持参している小冊子をあなた方の前で読み上げていただきたい。それは聖なるアウグスブルク教会のかつての司教、敬うべきウダルリクスの伝記と奇跡とに関するものです。そして、あなた方の思う通りに判断を下していただきたい。なぜなら、聖霊がこの場に実在することと、聖職者が集まっていることによって、我々が読むことが確かなことと証明されるからです。というのも、我々の真理が欺くことはあり得ず、それについては福音書のなかにこう述べられています。『二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである。』*10 もしそうだとすれば、このような少数者の集まりにも聖霊は欠けていないのですから、今やこの場にはいっそのこと聖霊が居合わせているものと我々は信じます。聖なる者たちの群れが一つに集い、確かにこの集まりは払われるべき敬意のゆえに神聖であるのですから。」

そして前述のたいへん聖なる司教の伝記が読み終えられると、話は奇跡へと進んだ。それらは、あるいは生前に、あるいは死後に生じたものである。すなわち、盲人に光を取り戻させたこと、取りつかれた身体より悪魔を追い払ったこと、麻痺した者たちを癒したこと、そしてペンとインクでは決して描かれなかった他の非常に多くのしるしを行ったこと、である。

我々は十分に優美な言葉遣いで書き上げられたこれらすべてを受け入れた。そして、ともに協議して、彼すなわち聖なる司教ウダルリクスの記憶が、深い愛情と確かな信仰心をもって敬われるべきことを定めた。

というのも、我々が殉教者や証聖者の聖遺物を崇め崇敬するのは、殉教者や証聖者が従っているその方を崇めるためであり、その僕たちを称えるのは、主において名誉が溢れんがためである。すなわち、主は言われた。「あなた方を受け入れる人は、私を受け入れるのである。」*11

さらにまた、自らの正しさに自信をを持つことのできない我々が、彼

* 10 『マタイによる福音書』第18章20節。

* 11 『マタイによる福音書』第10章40節。

らの祈りと功德によって、いとも慈悲深い神の前で、絶えず助けられるためである。なぜなら、神の非常に有益な命令、それから聖なるカノン法や敬うべき教父の教えは、すべての教会の敬虔な思慮をそなえた眼差しと、確かに使徒の統治の努力によって、有益なことを適宜に果たし、確実なことを損なわず行うよう強く促したらかである。すなわち、前述の敬うべき司教ウダルリクスの記憶が、神の崇拝に捧げられ、また末永くなされるべき神の賛美に常に役立つことができるように、と。

だが、そうしたことが起こると我々は信じていないが、もしだれかが軽率な企てから、我々のこの敬虔なる権威とこの特許状とによってしっかり定められたことに反対しようとしたり、前述の司教への敬意のために、神を称えて、我々により定められたことに反抗しようとしたり、あるいはなんらかの点で違反しようとするのであれば、その者は、我々が相応しからずも代理を務めている使徒たちの頭、至福なるペテロの権威によって、自らが破門という鎖で縛られているものと知るべきである。しかるに、敬虔な洞察から決定を守る者として振る舞う者は、最も慈悲深い主、我々の神から、祝福の恩寵を幾倍にも受け、永遠の命に与る者とされるだろう。

本状は聖なるローマ教会の地区書記にしてスクリニアリウスであるステファヌスの手で、第6インディクティオの年、993年の2月に書かれた。

私、聖なるローマのカトリック教会かつ使徒の教会の司教、ヨハネスは、我々によって公布されたこの教書に同意し、署名した。

私、聖なるアナーニ教会の司教、ヨハネスは同意した。

私、聖なるプリヴェルノ教会の司教、ベネディクトゥスは同意した。

私、聖なるフェレンティーノ教会の司教、ドミニクスは同意した。

私、聖なるシルヴァ・カンディダ教会の司教、クレスケンティウスは同意した。

私、聖なるチェルヴェテリ教会の司教、アンニソは同意した。

私、聖ルチア教会の首席司祭にして枢機卿、ボニゾーは同意した。

私、聖ステファヌス教会の司祭にして枢機卿、ベネディクトゥスは同意した。

私，聖ネレウス教会の司祭にして枢機卿，レオは同意した。

私，聖ダマスス教会の司祭にして枢機卿，ヨハネスは同意した。

私，聖シクストゥス教会の司祭にして枢機卿，レオは同意した。

私，聖アポストリ教会の司祭にして枢機卿，ヨハネスは同意した。

私，聖クアットロ・コロナーティ教会の司祭にして枢機卿，ヨハネスは同意した。

私，聖クレメンス教会の司祭にして枢機卿，ヨハネスは同意した。

私，聖カリスト教会の司祭にして枢機卿，クレスケンティウスは同意した。

大助祭ベネディクトゥス，助祭にして奉獻物係であるヨハネス，助祭ベネディクトゥス，助祭ヨハネス。これらはみな同意し，署名した。

2月3日，聖なるネピ教会の司教にして聖なる使徒座の文書係，ヨハネスによって，我々の主人であるローマ教皇，聖なるヨハネス15世の在位8年目，前述の月，第6インディクティオの年に与えられた。

3. 解説

教書の内容を概観すると，まず受取人への挨拶に続いてウルリッヒの列聖に至る状況が語られる。すなわち，アウグスブルク司教として，ウルリッヒより三人目の後継司教リウトルフス（在位988-996）が，ラテラノでの会議の際に，ウルリッヒの伝記と奇跡録を提示してウルリッヒの列聖を求めた。この要請に対して，会議の出席者たちは伝記，奇跡録の内容を受け入れ，ウルリッヒの記憶を敬うことを決定したのである。これに続いて，教書では，聖人崇敬の神学的根拠や意義が，ヒエロニムスからの引用などによって説明される^{*12}。さらに，決定への違反者，遵守者への報いが述べられ，教皇以下19名の署名と日付を以て教書は締めくくられている。

以上のような教書の内容から，ウルリッヒの列聖手続きにおいては，申請，調査，宣言という後に典型となる基本行為が見られることが指摘

* 12 F.X. Bischof, *op. cit.*, S.220, Anm.3.

されている*¹³。ただし、調査といっても申請者によって提示された伝記と奇跡を吟味するだけの簡単なものであった。なお、この時に読み上げられた伝記と奇跡録は*¹⁴、ウルリッヒの晩年に仕えたアウグスブルク教会参事会長ゲルハルトによる著作と考えられている*¹⁵。しかも、伝記はウルリッヒの後継司教ハインリヒ（在位 973-982）に対する批判を含んでいることから、ある種の宣伝的文書との指摘がある*¹⁶。

さて、この教書によって聖人と認定されたウルリッヒは、おそらく 890 年にアウグスブルクあるいはその付近で貴族の家系に生まれた。母のディートピルヒはシュヴァーベン大公ブルカルトの血筋で、またドイツ国王オットー 1 世（在位 936-973）の再婚相手アーデルハイドも同じく大公ブルカルトの血を引いていたことから、ウルリッヒ一族は同家を介してドイツ王家の血縁に連なるとされる*¹⁷。

両親によって聖職の道に定められたウルリッヒは、ザンクト・ガレン修道院付属学校で教育を受けた後、アウグスブルク司教アダルベロ（在位 887-909）のもとで会計係を務めた。司教アダルベロの死後、後継司教ヒルティネス（在位 909-923）との折り合いが悪く一時職務を退くが、ヒルティネスの死去にともなって、923 年、ウルリッヒは国王ハインリヒ 1 世（在位 919-936）から後継司教に任命された。

ウルリッヒはアウグスブルク司教として、都市城壁や教会施設の再建に努め、聖職者の教育水準の向上をはかり、司教区会議を開催し、教区内を定期的に巡回して裁判を執り行い、そして貧者の救済に務めた。また、自らは聖ベネディクト戒律に従った生活を送ったという。帝国司教として国王に忠誠を尽くし、オットー 1 世に対する息子リウドルフの反乱（953-955）に際しては、レーゲンスブルクの包囲に自ら軍を率いて参

* 13 R. Klauser, "Zur Entwicklung des Heiligsprechungsverfahrens bis zum 13. Jahrhundert", *Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Kanonistische Abteilung*, 40(1954), S.91.

* 14 伝記および奇跡録は *Monumenta Germaniae Historica, Scriptorum*, IV, Hannover, 1963, S.377-425 に収録されている。

* 15 F.X. Bischof, *op. cit.*, S.200-201.

* 16 M. Weitlauff, *op. cit.*, S.76.

* 17 *Lexikon des Mittelalters*, VIII, S.1173; M. Weitlauff, *op. cit.*, S.79-82.

加した。さらに、ハンガリーの撃退を決定づけたレヒフェルトの戦い(955)では、自らが戦場に赴くことはなかったが、司教軍を兄弟と甥とに委ねている。また、その前哨戦としての意味を持つアウグスブルク攻防戦では自らも戦って勝利に貢献した。このように、ウルリッヒはオットー1世の弟、ケルン大司教ブルーノとならんで帝国司教の典型と見なされている*18。

晩年には、オットー1世の信頼と好意に頼って、甥のアダルベロを後継司教に立てようと願うが、当人が急死したこともあってかなわず、頼みとするオットーも急逝した。ウルリッヒはあらためて親族のフルダ修道院長ヴェリンハールを後継司教としてオットー2世(在位961-983)に願い出るが、ウルリッヒは973年7月に死去し、聖アフラ教会に生前に用意しておいた墓に埋葬された。結局、アウグスブルク司教には、ウルリッヒの望みとは逆に、ハインリヒという人物が就いた。

ウルリッヒへの崇敬は彼の死後間もなくから始まり、墓では奇跡が生じて巡礼を集めた。伝記、奇跡録が書かれ、992年10月には列聖の先取りとも考えられる事件が起こっている。すなわち、オットー3世(在位983-1002)および帝国の貴顕が臨席するなか、ハルバーシュタットで聖ステファヌス聖堂の献堂式が行われたが、同教会の北側祭壇を捧げられた聖人には聖セバスティアヌス、聖ボニファティウス、聖アフラらとならんでウルリッヒも含まれていた*19。ウルリッヒは事実上聖人と見なされていたことになるが、この献堂式にも立ち会ったリウトルフスが、翌年になぜ教皇ヨハネス15世にウルリッヒの列聖を願い出たのか、その具体的理由は十分に解明されてはいない。

おわりに

オットー1世の介入以来、教皇権はドイツ王権とローマ貴族との力関係のなかを揺れ動く状況に置かれた。ヨハネス15世もこのような時代の教皇の一人である。同教皇はローマで優勢であったクレスケンティウス

* 18 F.X. Bischof, *op. cit.*, S.198.

* 19 *Ibid.*, S.212.

家の支持を得て位に登り、フランスの司教たちから同家への依存ぶりを非難されたほどであった。しかし、次第に同家の保護からの脱却を企て、ドイツ王家、すなわち幼少のオットー3世に代わって統治にあたったテオファーノやアーデルハイドの支持を求めようになった*20。アーデルハイドと血縁にあったウルリッヒの列聖を、ドイツ王権とヨハネスとの協調関係に位置づけるのも、一つの仮定として成り立つ*21。

また、ヨハネス15世在位期の主要問題の一つに、アルヌールとオーリヤックのジェルベール（後の教皇シルヴェステル2世）とが争ったランス大司教座問題があったが、ウルリッヒの列聖をこれと関連づけようとする解釈もある*22。さらには、ウルリッヒの崇敬を広めようとするウルリッヒ支持派とウルリッヒの後継司教ハインリヒ派との対立という、アウグスブルク教会の内部事情も見落とすことができない。

このように、教皇権がウルリッヒの列聖に関与するに至った背景には、列聖を盛大に挙げるという一般的な時代状況ばかりでなく、より具体的な問題が複雑に絡んでいたことが推察される。ただし、これらは列聖教書の真正性を前提とした議論でもある。これらの議論が逆に列聖教書の真正性を整合的に補強し得るほどのものかどうか、教書の真偽も含め全体として取り扱われるべき問題であろう。

* 20 G. Schwaiger, "Das Papsttum im Dunklen Jahrhundert", in: M. Weitlauff (Herg.), *Bischof Ulrich von Augsburg 890-973. Seine Zeit — sein Leben — seine Verehrung: Festschrift aus Anlaß des tausendjährigen Jubiläums seiner Kanonisation im Jahre 993*, Weißenhorn, 1993, S. 63-64.

* 21 Philippe Levillain (éd), *Dictionnaire historique de la papauté*, Paris, 1994, p.938; J.N.D. Kelly, *The Oxford Dictionary of Popes*, Oxford, 1986, pp.133-134.

* 22 F.X. Bischof, *op. cit.*, S.212-218.

聖ウルリッヒ列聖教書
写本および判読文

Johannes ep[iscop]us, servus servor[um] Dei, o[mn]ib[us] archiep[iscop]is, abbatib[us], in Gallia et Germania / co[m]morantib[us], karissima[m] salute[m] et ap[osto]licam b[e]n[e]dictione[m]. Cu[m] co[n]ventu[s] esset factu[s] in palatio / Lateranensi p[ri]die Kalendas Februaria[s], residende[n]te Johanne s[an]ctissimo papa cu[m] ep[iscop]is et p[rae]sbit[er]is, / astantib[us] dyaconib[us] et cu[n]cto clero, surgens rev[er]endissim[us] Luitolfus Auguste ep[iscopu]s inq[ui]t: D[omi]ne / s[an]ctissim[us]e p[rae]sul, si vobis placet et om[n]ib[us] ep[iscop]is et p[rae]sbit[er]is hic residentib[us], libellu[s] que[m] p[rae]manib[us] / habeo, cora[m] vob[is] legat[ur], de vita ven[er]abilis Udalrici, s[an]cte Auguste ecc[les]ie dudum ep[iscop]i, et q[ui]d libitu[m] / vob[is] fuerit, discernat[ur]. Quia Sp[irit]us S[an]cti testat[ur] p[rae]sentia et congregatio sac[er]dotu[m], certu[m] esse / q[uo]d legim[us], q[ui]a nec potest veritas n[ost]ra mentiri, cui[us] i[n] evangelio ista sententia e[st]: Ubi duo / v[e]l tres [con]gregati fuerint i[n] no[m]i[n]e meo, ibi et ego su[m] in medio eor[um]. Q[uo]d cu[m] ita sit, na[m] nec / huic ta[m] brevi num[er]o Sp[irit]us S[an]ctus deest, q[ua]nto mag[is] eu[m] nu[n]c interesse credam[us], q[ua]ndo in / unu[m] co[n]venit t[ur]ba s[an]ctor[um], s[an]c[tu]m na[m]q[ue] e[st] p[ro] debita ven[er]atio[n]e collegiu[m]. Cu[m]q[ue] p[er]lecta esset vita / p[rae]dicti s[an]ctissimi ep[iscop]i, ventu[m] e[st] ad mirac[ula] que sive i[n] corp[or]e, sive extra corp[us] gesta su[n]t, vi[deli]c[et] / cecos illuminasse, demones ab obsessis corp[or]ib[us] effugasse, paraliticos curasse, et plurima / et alia signa gessisse, que neq[ua]qua[m] calamo et atrame[n]to illustrata su[n]t. Que o[mn]ia lepida / satis urbanitate expolita recepim[us], et co[m]muni co[n]silio decrevim[us], memoria[m] illi[us], id est s[an]cti / Udalrici ep[iscop]i, affectu piissimo, et devotio[n]e fidelissima ven[er]anda[m], q[uonia]m sic adoram[us] et co- / lim[us] reliquias martyru[m] et co[n]fessor[um], ut eu[m] cui[us]

martyres et co[n]fessores s[un]t adorem[us], hon[or]- / am[us] servos, ut honor redundet ad D[omi]n[u]m, q[ui] dixit: Qui vos recipit, me recipit. Ac p[er]inde / nos qui fiducia[m] n[ost]re justit[ia]e no[n] h[ab]em[us], illor[um] p[re]cib[us] et merit[i]s apud cleme[n]tissimu[m] Deu[m] iugit[er] / adiuvem[ur], quia divina saluberrima p[rae]cepta, et s[an]ctor[um] canonu[m] ac ven[er]abiliu[m] patru[m] in- / staba[nt] efficacit[er] docume[n]ta omn[ium] ecc[les]iar[um] Dei pio [con]sid[er]at[i]o[n]is intuitu, immo ap[osto]lici mo- / deraminis annisu, utilitatu[m] co[m]moditate[m], atq[ue] firmitat[i]s p[er]fic[er]e i[n]tegritate[m], quaten[us] me[m]o- / ria Udalrici ia[m] p[rae]fati ven[er]abilis ep[iscop]i divino cultui dedicata existat, et i[n] laudib[us] Dei diu- / tissi[m]e p[er]solvendis sem[per] valeat p[ro]fic[er]e. Si q[ui]s i[n]terea, q[uo]d no[n] credim[us], temerario ausu co[n]tra / ea q[uae] ab hac n[ost]ra auctoritate pie ac firmit[er] p[er] h[oc] n[ost]ru[m] p[ri]vilegiu[m] disposita su[n]t, co[n]traire / te[m]ptav[er]it, v[e]l hec que a nob[is] ad laudem Dei, p[ro] rev[er]entia ia[m] dicti ep[iscop]i statuta su[n]t refragari, aut / i[n] quoqua[m] transgredi, sciat se auctoritate b[e]ati Petri p[ri]ncipis ap[osto]lor[um], cui[us] v[e]l i[m]meriti vices / agim[us], anathemat[i]s vinculo i[n]nodatu[m]. At v[er]o q[ui] pio i[n]tuitu obs[er]vator exstit[er]it, b[e]n[e]dictionis / gra[tia]m a mis[er]icordissi[m]o D[omi]no Deo n[ost]ro multiplicat[er] co[n]seq[ua]t[ur], et eterne vite particeps efficiat[ur]. / Scriptu[m] e[st] p[er] manu[m] Stephani notarii et regionarii et scrimiarii s[an]cte Romane ecc[les]ie, i[n] / mense Februario et i[n]dictione sexta, anno no[n]ge[n]tesimo nonagesi[m]o tertio. / Ego Joh[ann]es s[an]cte Romane catholice et ap[osto]lice ecc[les]ie ep[iscop]us huic decreto a nobis p[ro]mul- / gato consensi et subscripsi. Joh[ann]es ep[iscop]us s[an]cte Anagnine ecc[les]ie [con]sensi. B[e]n[e]dict[us] ep[iscop]us / s[an]cte Pip[er]niensis ecc[les]ie [con]sensi. D[omi]nic[us]

ep[iscop]us s[an]cte Ferentine ecc[les]ie [con]sensi. Crescenti[us]
ep[iscop]us / s[an]cte Silve Candide ecc[les]ie [con]sensi. Annizo
ep[iscop]us s[an]cte Carensis ecc[les]ie [con]sensi. Bonizo
archip[re]s[b]yter / et cardinal[is] s[an]cti Stephani [con]sensi.
Leo p[re]s[b]yter et cardinal[is] s[an]cti Nerei [con]sensi.
Joh[anne]s p[re]s[b]yter et / cardinal[is] s[an]cti Ap[osto]li
[con]sensi. Joh[ann]es p[re]s[b]yter et cardinal[is] s[an]ctor[um]
q[ua]tuor coronator[um] [con]sensi. Joh[ann]es p[re]s[b]yter et
cardi[n]al[is] / s[an]cti Cleme[n]t[is] [con]sensi. Crescensi[us]
p[re]s[b]yter et car[dinali]s s[an]cti Calisti [con]sensi.
B[e]n[e]dict[us] archidyacon[us], Joh[ann]es dyacon[us] / et
oblationari[us], Joh[ann]es dyacon[us]. Hii [con]senser[un]t et
subscripser[un]t. Data iii K[al]endas Februar[is] / p[er]
man[um] Joh[ann]is ep[iscop]i s[an]cte Nepesine ecc[les]ie et
biblioteca[r]ii s[an]cte sedis ap[osto]lice anno po[n]tificat[us] /
d[omi]ni n[ost]ri Joh[ann]is s[an]ctissimi xv pape octavo i[n]
me[n]se dicto et indictione sexta.